

平成 30 年度東播磨地域夢会議（H30.12.1）議事録

1 プレゼンテーション

Part1「都市近郊農村の実態から」（神戸学院大学 人文学部人文学科 矢嶋ゼミ）



神戸学院大学人文学部人文学科矢嶋ゼミの発表を始めます。よろしくお願いいたします。矢嶋ゼミでは、2011年9月から加古川市西神吉町周辺で都市近郊農村の価値を探る研究を行っています。私たちも「農村移住班」「農村と女性班」「災害記憶班」「水害対策班」「農村活性化班」の5班に分かれて、2018年9月8日から10日の3日間、この地域で夏合宿調査を行いました。近年、地方消滅の危機が叫ばれる中、この地域でも人口が流出傾向にあり、人口が減少してきています。しかし、都市近郊農村に価値を見出して暮らしている人もいます。そこで、この地域に住んでいる人たちの生き方や苦勞に迫る聞き取り調査を行いました。この研究を通して、東播磨地域における都市近郊農村の価値やこれからの課題、持続可能な地域の構築に向けた方策を検討し、都市近郊農村で生きていく意味について考えました。夏合宿調査を行った主な地域は、加古川市西神吉町の西脇地区、宮前地区及び富木地区の3地区です。それでは、調査結果について発表させていただきます。

「農村移住班」の研究結果について発表いたします。この班では、Iターンで移住してきた人や大都市での単身赴任から戻ってきた人が、都市近郊農村である加古川市西神吉町にどのような魅力を感じているのかを明らかにすることを目的に調査をいたしました。そうした中、3人の男性に西神吉町の魅力についてお聞きしたところ、70代のIターン者は気軽に話せて相談に乗ってくれる人が多いことや、交通の便が良いことを挙げられました。30代のIターン者は、北播磨の前住地と比べて災害が少ないことや、加古川バイパスや宝殿駅があり、交通の便が良いことを挙げられました。大阪府での単身赴任から戻ってきた70代の方は、自然環境が良いことを挙げられました。また、西神吉町での暮らしの不安についてもお聞きしたところ、70代のIターン者は特にないとのことでした。30代のIターン者は、過疎化が進み若い世代が少ないことや、県道515号線沿いに面している自宅の周囲では歩道が未整備で子どもの通学距離も長いと、子供の安全に不安があるとのことでした。単身赴任から戻ってきた70代の方は、地域の過疎化が進み、将来に不安があるとのことでした。西神吉町の生活環境は、とても良いと感じられている一方、過疎化が進み若い世代が少なく、子供の安全面に不安があるとのことでした。





「農村と女性班」では、都市近郊農村に住む女性に焦点を当て、女性たちが感じた地域の魅力と課題について考えました。聞き取り対象者は、「嫁いできた女性（60代）」「嫁いできた女性（70代）」「Iターンしてきた女性（70代）」「Uターンしてきた女性（30代）」の4名です。聞き取り調査から分かった女性を感じているこの地域の良さは5点です。1つ目は、「穏やかで安心して子育てできる」ことです。住民同士の地域コミュニティがあるため、子どもたちが犯罪や事故に巻き込まれる危険性が少ないと語っていました。2つ目は、「畑仕事ができる」ことです。畑仕事は、女性にとって趣味の1つになっていました。収穫した野菜などをご近所にお裾分けし、コミュニケーションを取るきっかけにしているということです。3つ目は、「自動車があれば暮らしやすい」ことです。特に、買い物・仕事・子どもの迎えなどに自動車を利用していました。4つ目は、「駅まで出やすい、渋滞が少ない」ことです。5つ目は、「多機能かつ高機能な介護施設により時間ができた」ことです。介護は夫である男性ではなく、女性の役割になっているのが現状です。そうした中、多機能かつ高機能な介護施設ができたことで、女性は家事の時間や、自分の時間を確保できるようになりました。施設数はまだまだ少ないため、さらに増やしていくことが今後の課題であると思います。以上のとおり、女性たちは都市近郊農村である加古川市西神吉町を生活しやすい環境であると感じていました。このことについて、私たちは予想しておらず、意外な回答に驚きました。ただし、不便ではないが、地域に人が少なく寂しいため、若い人と子どもが増えて欲しいという意見もありました。

「災害記憶班」です。今年の日では、地震や台風など自然災害が多く発生し、自主防災組織に注目が集まりました。この班では、2011年の法華山谷川における水害の記憶について研究しましたが、今回はこの水害をきっかけに、高砂市北部のある住宅団地で結成された自主防災組織について取り上げます。この地区には、2011年の法華山谷川の氾濫による浸水被害をきっかけに結成された



自主防災組織があるものの、自治会長や自主防災組織会長によれば、住民の防災への意識が低く、防災訓練に参加する人は少ないとのこと。また、自主防災組織という言葉すら知らない住民もいるとのことでした。自主防災組織の参加率が100%に達することも無理だと考えられていました。現在の法華山谷川では、2011年の水害を基準に治水対策をしているため、この年の雨量を超えると住宅地が再び浸水する恐れがあると考えられています。この地域は、短時間に大量に降る雨によって、内水氾濫が起きやすいと考えられるために、大雨が降るとテレビやインターネットの気象情報から目を離せないとのこと。

今後、この地区で自主防災組織の活動を継続していくためには、後継者を育てていく必要があります。そのためにも自主防災組織の活動について広く知られる必要があると考えます。



「水害対策班」では、加古川市西部地域で行われている総合治水対策に関して、排水機場が抱えている問題と課題について発表します。この地域では、法華山谷川を整備し、ため池の貯留などを活用して、水害による被害を軽減し予防する総合治水対策が行われています。加古川西土地改良区排水機場は、大雨の際に農村地域を流れる中小河川の水位をポンプによって下げることで減災につなげるもので、下流における住宅地域の減災にもつながっています。土地改良区理事長及び事務長によると、排水機場が抱える問題点として、施設の老朽化が挙げられます。大雨の際に稼働させるときには、夜間も起きておかなければならないことがあり、管理者の負担が大きいことと、施設を管理する地区住民の高齢化が進み、施設管理を受け継ぐ人がいないことが問題となっています。下流地域における住宅地域の住民は、排水機場を目にする機会がないため、以上のような問題点について理解が薄いと感じているとのことでした。排水機場は、管理者の負担が大きいものの、水害対策として有効な手段であるため、将来にわたって存続させていかなければならないと考えているとのことでした。

「農村活性化班」です。この地域では、都市近郊農村をより盛り上げていくため、イベントが多数行われています。この班では、加古川市西神吉町の西脇地区、富木地区及び宮前地区のイベントに注目しました。まず、西脇地区では、ジャガイモ収穫祭、世代間交流、そして新嘗祭が行われています。ジャガイモ収穫祭では、参加した都市住民が世代に関係なく、ジャガイモを収穫しその後、地域住民とも交流するイベントです。しかし残念ながら、今年で終了しました。世代間交流では、スポーツ大会、むかし遊び、ビンゴ大会などを行い、地区住民が世代に関係なく交流しています。次に、富木地区では、かいぼりや世代間交流、新嘗祭が行われています。かいぼりは、ため池の点検や水質改善、外来生物の駆除を目的に行われており、地区住民や私たち学生が交流する場にもなっています。世代間交流では、老若男女が世代に関係なく、談話や歌唱教室などを行っています。最後に、宮前地区では、トウモロコシのもぎ取り体験や芸能大会、新嘗祭が行われています。トウモロコシのもぎ取り体験は、地区以外の人でも参加でき、2014年から続いています。このイベント参加者はリピーターが多く、4回参加している人がいるほどです。芸能大会では、他地区からの参加者を募集し交流を図っており、カラオケ大会を開催するなど、より一層盛り上がっています。そして、3つ



の地区は神吉八幡神社で秋の新嘗祭が行われています。地区住民だけではなく、西神吉町と東神吉町の地区を超えた交流が行われています。以上のとおり、各地区で様々なイベントが行われ、地区住民同士が世代に関係なく、ふれあいながら交流を深めています。地域のイベントをより一層盛り上げていくことで、将来的な活性化を促していくべきだと思います。



以上のことをまとめます。加古川市西神吉町における研究から見てきた都市近郊農村の価値と課題として次のことが言えると思います。まず、加古川市西神吉町の都市近郊農村は、Iターン者や単身赴任から戻ってきた人にとって魅了を感じられる場所でした。JR山陽本線や加古川バイパスがあることから、交通の便が良いと感じられています。しかし、自家用車を使えることが前提となっています。しかし、実際には駅周辺の駐車場は十分整備されているとは言いづらい状況であり、都市近郊農村では歩道が整備されていないところが多く、子育て世代は子どもが交通事故の被害者になる不安があると思われます。また、将来に向けて介護施設のさらなる充実も重要です。2011年の法華山谷川の氾濫による浸水被害以降、治水対策が行われていますが、住宅地域を浸水から守っている排水機場の老朽化や、管理者に負担がかかっていることについては、あまり知られていません。水害をきっかけに、自主防災組織を結成した住宅団地もありましたが、住民の関心が低いことが現実です。農村地域の方が水害を予防していることや、自主防災組織の活動が広く知られる必要があります。都市近郊農村では、各地域で様々なイベントが行われ、世代に関係なく交流が図られています。こうした活動がより活発になるように、みんなで支援していくことで、都市近郊農村をより魅力的なものにすることが必要です。そうすると、この地域にIターンやUターン者がもっと増えるのではないのでしょうか。これらのことは、東播磨地域のどこにでも当てはまると思います。以上、私たち神戸学院大学人文学部矢嶋ゼミの研究から分かったことです。ありがとうございました。

Part2 「兵庫 2030 年の展望」(兵庫県副知事 金澤 和夫)

「兵庫 2030 年の展望」について、東播磨地域夢会議の参加者に周知を図り、展望の実現に向けた主体的な活動を促進しました。

○ 「兵庫 2030 年の展望」の策定趣旨

人口減少や少子高齢化、革新技術の浸透など、社会が大きく変化し、不透明感が増す中、2030年頃の兵庫のめざす姿を描き、県民と広く共有する。

(参考) 「兵庫 2030 年の展望」の策定(兵庫県ホームページ)

URL <https://web.pref.hyogo.lg.jp/kk07/hyogo2030.html>